

南のひと 18

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島の種子取祭では、毎年太鼓を叩く行列の中で、赤い若衆の着物を着てションコー（鐘）を叩く役が小学生の男子生徒の中から1人決められる。

新井結大くんは、小学5年生の時にその役を演じた。小さい島の小規模校、当時5年生のクラスは全員で5人。その内、男子は彼1人だった。

科学が好きで、本が好きな彼は休み時間は読書をして過ごすような、どちらかというと無口で静かな少年だった。

普段あまり目立たない彼だが、当時彼のお母さんから聞いたエピソードで面白い子だな、と思わせる話があった。それは、彼が読んでいた機械工学の本から東海大学の教授に手紙を書いていたという話だ。彼は興味のある人と繋がるために自分の意志で行動を起こせる人なのだ。

現在中学1年生になった結大くんに当時の話を聞きに行った。

「なぜ小学5年生の時、東海大学の教授に手紙を書こうと思ったのですか？」

「図書館で偶然出会った本がきっかけでした。ソーラーカー（太陽光の力で走る車）の本だったんです。僕は元から科学に興味があり、ソーラーパネルや車にも興味があったので、この本を読んだ時に、僕もソーラーカーを作って、競争してみたい。と思ったんです。本の中で、東海大学の車がレースで優勝するのですが、自分たちが優勝したのではなく、このプロジェクトを応援してくれた様々な日本の企業や工場が優勝したのだ、というようなことが書いてあり、それを読んだ時に僕はこの大学で学びたい、このチームの一員になりたいと思ったんです」と当時の心境を教えてくれた。この思いは中学生になった今も変わらないそうだ。

最後に、「小学2年生の頃からずっと男子1人で寂しいと思ったこともあったけど、1人だったから読書にも出会えたり、好きなことも見つかった。結果良かったと思っている」と清々しい表情で話してくれたのが印象的だった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



天願恵子さんが働く(有)大喜産業大川店(社長・呉屋芳徳、呉屋喜美子)の「やおやさん」には、恵子さんのお母さんの代から通って来る年配のお客さんから、最近近所に移り住んできた人、観光で島をおとずれている人、そして私のように離島の島々から石垣島に通って来る年齢も暮らす場所もさまざまなお客さんたちが毎日途切れることなく買い物にやってくる。

私は、時折り夕飯のおかずの刺し身や豆腐などを買いにフラリとお店に立ち寄る。お店で繰り広げられるその日限りのお店の人とお客さんたちの会話がたまらなく好きで、買う物を選ぶふりをして、必要以上に長居するのが私の密かな楽しみだ。赤いポロシャツのユニフォームが似合う恵子さんは、程よい間合いで声をかけてくれたり、他のお客さんに近所のニュースを提供したりしている。

恵子さんが3歳の頃にご両親が始めたこのお店を彼女は、「大切で大好きな場所」だという。まだ高校生だった頃にお母さんが病気で他界してしまい、夕飯の作り方は常連のお客さんが買い物に来ると、「これとこれで、どんな料理を作るの?」とレジカウンター越しに聞き、試して作ってきたそうだ。美味しくできると、次は自分が買い物にくるお客さんに作りかたを教えたりもしている。

「恵子さんの人生はずっとこのお店と共にあるのですね」と私が言うと、「そうね、お店に来るお客さんや業者さんたちが私を育ててくれたようなものね」と言い、一呼吸おいてから「私は、すべての人に幸せになる権利があると思うの。どんな人生でもね、みんな平等に幸せになる権利。それをこのお店で少しでもお手伝いできたら良いなと思っているの」と少し照れたような口調で話してくれた。

お店の前で恵子さんを撮影していると、お母さんの代からの常連さんが、「そっくりなのよ、この人、お母さんに」と私に嬉しそうに声をかけてからお店に入って行った。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



新井貴子さん、内盛美生さん、隅田風太さんと根原富也さんは今年15の春を迎え、竹富中学校を卒業して島から旅立って行く。4人はとても良いバランスでお互いの違いを受け入れ合い、それぞれの個性を大切に守っているように見える。そんな彼らを一緒に撮影したくて、よく晴れた土曜日の朝、コンドイビーチに集合してもらった。

撮影から数日後、一人一人を訪ね、幾つかの同じ質問を投げかけてみた。答えそのものよりも、話し方、姿勢や表情にそれぞれの意志や想いがにじみ出ていて彼らの本心に少しだけ触れさせてもらった気分になった。

「あなたの夢は、何ですか？」という質問に、「小学生の頃は、俳優になりたいという夢があったけれど、中学生になって諦めていた。今年、同級生のみんなと将来の夢について話し合ったことがきっかけで、もう一度目指したいと思うようになった」と1人が真剣な面持ちで答えてくれた。そのことを他の3人に伝えると、反応はそれぞれ違ったが、1人が何気なく発した「何も考えていないようで、実はみんな考えているんですよ」という言葉が心に響いた。

その声には、共感と信頼とほんの少しの切なさがあり混ざったような大人びた音があった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 21

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。

玉城大地くんとは、約1年ほど前に石垣島の撮影現場で出会った。人当たりの良い好青年で、悩みなど無いお坊ちゃんなのだろうという印象を受けた。その後、SNSで繋がっていたことがきっかけで、大地くんが高校卒業後に海外で勉強を始めたことを知り、日本の大学ではなく、なぜ海外へ向かったのかを知りたくて、カナダから一時帰国している大地くんにつながしてみた。

大地くんは、私が抱いていたイメージからは、ほど遠い複雑な想いを抱えながら日々を過ごしてきた青年だった。

「家族が八重山では少数派であるキリスト教徒だったこと、5人姉弟の上2人の姉が精神疾患を患っていたこと、一番上の姉とは18歳も離れていたことで、親の年齢が同級生の親達よりずっと上だったことなどで、幼少期のころから自分は周りから浮いている気がしていた。とにかく“ふつう”になりたいと思いつづけていた。周りと違う事がとてもこわかった」と話してくれた。

胸の内のモヤモヤと向き合うには、まず自分を知ることだと考えた大地くんは、海外に出て自分を確かめてみたいと思うようになったという。高校卒業後は英語を学ぶためフィリピンへ3ヶ月間、その後バンクーバーのカレッジを目指すためカナダへ留学した。

カナダでは、人は皆それぞれ違う価値観を持って暮らしていることが当たり前で、その違いを尊重し合うことも当たり前の社会だ。友人達と話していても自分は1人の人として尊重される。そんな中で、自分をもっと大切にしようと思えるようになったと語ってくれた。

「卒業後は何がしたいですか？」という質問に、「朝から晩まで働き続けて自分が好きな場所で勉強できるようにサポートしてくれている両親を、旅行に連れて行ってあげたい」と素直な口調で答えた。

別れ際に、“ふつう”…“ふつう”っていったい何が“ふつう”なんでしょうねえ？」と言いながら、アハハハ！と笑った大地くんの姿はとてもたのもしく、その吹っ切れた笑いは、私を爽快な気分にくれた。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 22

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



米盛絵利奈さんとは、石垣島の白保集落の中にある小さなカフェで出会った。

「いつか撮影させてね」と声をかけていたものの、彼女を白保集落のどこで写したら良いかが思い浮かばず、撮影への一歩が踏み出せずにいた。

しばらく経ったころ、絵利奈さんは大浜から白保へ嫁いで来たことを知った。

彼女の両親と兄は“まるべ”という居酒屋を大浜で営んでいる。今年の初めに、絵利奈さんと一緒に“まるべ”で集う機会があり、初めてお店をおとずれた。

店内に入った途端、「なるほど。絵利奈さんは、ここで撮影しよう」と一瞬で決まった。そこには、彼女がなぜ彼女なのかの答えが詰まっているように感じた。

“まるべ”を一言で表すなら、「ちょうど良い感じのお店」だろうか。壁と天井には大浜まるべ海岸沖で釣れた魚の魚拓や、手作りの凧、獅子のかしら、地元バンドのコンサートポスターなどが飾られている。お店の広さ、照明の明るさ、お客さん同士の間合い、店内装飾にいたるまで、無理が無くちょうど良い感じなのだ。

その後、日を改めて昼間の“まるべ”で、絵利奈さんと向き合った。

絵利奈さんは、“まるべ”を「居場所」とか「もう一つの実家」という言葉で表した。

「お客さん同士の結びつきや、偶然の出会いから織り成される人同士の縁を、ひしひしと感じられるこのお店がとっても大好き」と話す絵利奈さんは、お祭りや結婚式などの司会のお仕事も行っている。お客さんを迎える側の人々がどんな気持ちなのか、何を望んでいるのかを、会話をしながら感じ取り、喋る言葉を選んで行くそう。会場のお客さんが絵利奈さんの言葉を聞く時にどうしたら心地よいかをいつも考えていると言う。

「私は難しい言葉は使わないんです。誰が聞いても優しく、でもしっかりと伝わる言葉を常に探しています。人が望んでいる事にどうしたら上手く答えられるかばかりを考えているので、私って“自分”が無いんですよ」と真顔で話す絵利奈さんに思わずずっと吹き出してしまった。そこには、絵利奈さんという“自分”がにじみでていたから。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

「南のひと」5月号本文、上から3段2行目、誤った数字を掲載してしまいました。（誤）上3人の姉（正）上2人の姉
お詫びして訂正いたします。校正方法を見直し、工夫することでミスを減らす努力をしていきます。（やいま編集部）

南のひと 23

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の與那國光子さんは、鮮やかな色合いのオリジナルファッションに身を包み、胸をはって堂々と歩くキャリアウーマンだ。島の祭りを司る神司としての役をこなしながら、長年島のガイドをこなしてきた。與那國さんは地域話題を発信するラジオリポーターとしても活躍している。

以前、遠く離れて1人暮らしをしている私の母から、「今朝は、竹富島の人の声で目を覚ましたよ」と嬉しそうな声で電話がかかってきた。「満天の星を楽しむために電気を一斉に消すんだってね。素敵だね」と「南の島の星まつり」についての話だったことを知らされた。離れて暮らしていてもラジオ放送で母と繋がれた事が嬉しかった。

本土復帰（昭和47年）前、テープに声を録音してそれをラジオで流してもらったのがリポーターとしてのキャリアの始まりだったそうだ。昭和53年からは自動ダイヤルになり、電話でテレビ中継などの生放送のリポートができるようになった。昭和60年には、NHK 沖縄ラジオ放送番組内でリポートをしながら平成元年に九州全域で放送される番組にも携わるようになった。その後、平成9年からは、NHK 全国放送でのリポートをスタートさせ、現在も3ヶ月に一回のペースで「NHK マイあさラジオ」より地域話題を全国のリスナーへ届けている。

話す時に気をつけていることは、そこに物語が見えるように伝えることだという。ガイドという仕事柄、勉強のため全国をまわって視野を広げてきたことで、例え話ができることや、暮らしの中で植物や動物について自然と興味がわき勉強することができたのも良かったと話してくれた。「ラジオの與那國さんですよ」と旅先で声をかけられたり、「放送を聞いて竹富島にきました」と彼女を尋ねてくる人たちが沢山いるのだと嬉しそうに話してくれた。

最後に、「忙しくて大変な時も疲れたと言わない。楽しいね、と言って乗り切ってきたよ。私にとってのファッションとは、そういう風になれた自分へのご褒美なの」と言い、霧雨の中、大きなストールをふわりと巻きザクザクと砂の道を鳴らしながら與那國さんはさっそうと帰っていった。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 24

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



暮らしの営みが見えにくい観光地にはなかなか興味を抱きにくい。私にとっての川平湾周辺とは、そんな場所だった。

3月の半ばに、撮影の仕事で川平湾をおとずれ、同行していたMさんが、「お久しぶりです」と展望台で会話を交わしていたのが『公園茶屋』の岸本亮さんだった。川平湾周辺で暮らす『人』に、初めて出会った。

岸本さんは、5年前に石垣から川平に移り住み、祖母の代から始まった『公園茶屋』を受け継ぎ、母親と一緒に営んでいる。昭和36年に冷たい物をお客さんに出すお店として始まり、その後そばをメニューに加え、ひとり旅で訪れる学生などが「今晚泊めてもらえないでしょうか？」と訪れるようになったことがきっかけで、民宿も始めた。

「小さかった頃の川平湾での思い出を教えてください」と聞くと「お父さんが仕事でグラスボートに乗っていたので、町から遊びに来るたびに一緒にボートに乗った。30年ぐらい前の川平湾の珊瑚は見事だったよ。お昼には、子ども心にカレーライス食べたいな、と思いながらも、じいちゃん、ばーちゃんの作るそばを食べていたよ」と冗談交じりに話してくれた。当時は、自家製麺だったので、麺を作るのを横でよく眺めていたそうだ。「茹でたての麺を横から味見していたよ。あれは美味しかったな」と亮さんは懐かしそうに笑みを浮かべた。

岸本さんは暮らしの中で、日記を書くように川平湾の写真撮っている。

「忙しい時は、朝5時ぐらいからそばの仕込みをするんだけど、夜が明けてきて、空が赤く染まってきたら、今だ！とカメラを持って走ったり、夕方仕事が終わってホッと一息つきながら夕日を撮りに出かけるんですよ」と教えてくれた。岸本さんの写す川平湾は、観光地、川平湾ではなく自宅の前の風景、川平湾なのだ。そこには、人の営みがあり、日常というストーリーが更新され続けている。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 25

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の内盛美咲さんとは、一緒にいるだけで彼女の笑顔に誘われて、こちらも「ふふふ」と自然に笑みがこぼれる。両肩が少し上がるような「ふふふ」という笑いだ。そんな彼女からは、島の穏やかさやおおらかさを感じて一緒にいると心が和む。

五人きょうだいで長女の美咲さんのことは、小さい頃から三回に渡って撮影している。最初にカメラを向けたのは、彼女が十歳ぐらいのころで飼い犬のクンタも一緒だった。小学生の美咲さんと歩くクンタは彼女の隣でとても大きく見えた。少し困ったような笑みを浮かべながら引っ張られるようにして歩いている美咲さんの姿が印象的だった。

二回目の撮影は、美咲さんが高校を卒業して本土へと旅立つ前だった。セーラー服姿の美咲さんを写したくて声をかけた。この時もクンタは彼女と一緒に写真におさまった。三回目は彼女が成人した年のお正月、着物を着た美咲さんを囲んでの家族写真にクンタも一緒に写っていた。

そんな風にいつも側にいたクンタは、今年の七月七日、七夕の日に天国に逝ってしまった。十六歳だった。学校から帰って来た娘から小さい声で「クンタ死んじゃったって」と告げられた。

その日の夜、美咲さんの SNS の投稿には、笑顔の彼女の横でクンタも笑っているように見える写真と共に、クンタへのお別れの言葉が綴られていた。

——くんたのお姉ちゃんです。ありがとうございました。



水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 26

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



青空が広がる晴れた日の朝、大潮の満潮の海辺で、青い髪の朱里さんを撮影させてもらった。竹富島出身の内盛朱里さんは、現在 19歳。今年からオーストラリアのサンシャインコーストにある大学で生態学を学ぶために留学する予定だったが、新型コロナウイルスの影響により留学生受け入れ時期が延期になってしまい、来年の2月まで地元竹富島に帰ってきている。

「日本の大学生は、オンライン授業などで新学期がスタートして、同級生のお友達は大学生になっていますが、朱里さんはそのことについてどのように感じたり、考えたりしていますか？」とコロナ禍の中で待たされたをかけられてしまった朱里さんが、このどうにもならない状況の中で、一人で何を考え、感じているのかを彼女の言葉で聞きたくて、少々不躰とも思える質問を投げかけてみた。

「私も早く大学生になりたいと思うし、新しい人間関係も構築したいと思うので羨ましいです。でも、私はまだ大学生になれない分時間があるので有意義に過ごしたいです。島でバイトしたり海に行ったりして島での時間を満喫しつつ、将来のこともしっかり考え勉強も怠らないようにしたいと思っています。コロナのせいで色々なことが制限されて、私自身も渡航することができないけど、それは私だけではないしどうしようもないので仕方ないのかなという感じはあります。でも正直、早く大学生になりたいです」という言葉が返って来た。

周りの同世代が少しずつ前進しているかのように見える中、一人取り残されてしまったような焦りや孤独を感じる時もあるかもしれないが、この時間が朱里さんのこれからの人生の肥やしになることを信じて、この期間に彼女にしか体験できない物事を竹富島で吸収してほしいと思った。朱里さんが海外で会う人たちは、彼女をとおして、竹富島を感じ、想像し、知るきっかけを見つけるから。

青い髪の朱里さんは、大きな羽を広げて飛び立つ準備をしている青い鳥みたいだなと思った。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 27

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



イラストレーターの熊谷溢夫さん(84)との出会いは、息子さん夫婦が竹富島で営む「手作り工房 KUMA」の取材をさせてもらったのがきっかけだった。溢夫さんの作品は、月刊「やいま」での連載や、やいま方言むかしばなし『屏風山の蛇』や、『美しい自然があるからみんな元気で生きられる。』(南山舎発行)などで以前から拝見していたけれど、溢夫さん御本人とお話しをしたのはこの時が初めてだった。

今年8月末に石垣市図書館の展示室で溢夫さんの作品展を観て来たことを息子さん夫婦にお伝えすると、「お父さん、今僕達と一緒に暮らしているんですよ」と教えてくれた。

裏座に敷かれた溢夫さんの布団の横には、絵の具が入った容器やパレットが並べられた低い机が置かれていた。疲れたら横になり、起きたら直ぐに仕事に取りかかれるように常に作業机には仕事の用意がされているようだ。

この風景を見た瞬間、「私は生涯現役で写真表現を続けられるだろうか？」と反射的に自分に問うていた。

溢夫さんは、東京のデザイン会社に勤めていた頃、東京日本橋高島屋のイラストを任されていた。その仕事が評価され、他の企業からも声を掛けられるようになり、いくつもの仕事をこなしていたことから体調を崩してしまった。その後、東京から離れて、海外を旅しながら自分の好きなペースで仕事を再開するようになっていった。

1986年ごろ、石垣島のホテルに飾る絵やパンフレット作りの依頼がきっかけとなり、家族で石垣島に移り住むことになった。その仕事の為に沖縄の島々を渡り歩いている時に出会ったのが、島々で語り継がれてきた民話や童話だった。約300話を元に溢夫さんは作品を作りだしてきた。

一私たちのまわりには 命が 満ち溢れている 息ぐるしくなるほどに 満ち満ちた 命たちがひしめき合い それぞれが 糧となり 糧とし (『美しい自然があるから みんな元気で生きられる。』)

溢夫さんの言葉の奥には作品づくりの土台が垣間見える。揺るぎのない土台を築く為、私も撮り続けて行こうと思う。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介しているYouTubeチャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 28

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



石原孝子（いしはら たかこ）さんは、旦那さんの和義（かずよし）さんと一緒に西表島で『農家民宿 マナ』を営んでいる。孝子さんと私は、同じころ八重山に移り住んだ。今から約20年前になる。孝子さんとは、深い話をするような仲ではなかったけれど、同じ時期に八重山に移り住み、共に八重山の離島暮らしの時間を共有して来た同志のような仲だ。

そして、孝子さんは、私にとってのターニングポイントのきっかけを作ってくれた人でもある。2016年の春に、「八重山毎日新聞の日曜随筆を書いてみたい？」と孝子さんから電話があった。

それまで私は人に読んでもらうような文を書いたことが無く、ましてや新聞に自分の書いた文が掲載されるような経験もしたことがなかった。もしこの話がこの年の春ではなく、もっと前の年だったなら、私は断っていたと思う。たまたまその年の初めに自分に課していた課題が、訪れる仕事の話は断らずにチャレンジしてやり遂げる、というものだった。一歩踏み出すのにいつも躊躇して決断するのに時間がかかりすぎる自分を変えたかったのだ。もしあの時に孝子さんからのお話を拒んでいたならば、今のような仕事のスタイルや、人々との出会いや繋がりには至っていなかったと思う。以来、孝子さんには感謝の気持ちを伝えたいとずっと思っていた。

先日、娘を連れて初めて『農家民宿 マナ』に一泊泊りに行ってきた。何よりも島の食材を使った体に優しく美味しい料理が楽しみだったのだが、期待を上回る滞在となった。赤瓦の家を一軒丸ごと借り、自由に弾けるピアノがあり、中庭には大きなガジュマルの木からブランコが下がり、夕方や明け方の散歩はシイラ川を眺めながら西表島の大自然に心奪われ、孝子さんと和義さんの農業の話や猪狩の話に圧倒され、たった一泊なのに素晴らしい旅をした感覚を味わうことができた。

「八重山の島々は海に隔たれ離れ離れだけれど心は繋がっているよ」というような言い方を島人は時折する。旅から帰った数日後、夕焼けに染まるコンドイ浜から西表島を眺めながらふっとそんな事を思った。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。